高等学校教育課程研究集会
参考資料
平成１９年８月　岐阜県教育委員会

国　　語

1　国語科の目標とねらい

Q　学習指導要領では国語の目標はどのように示されているか。

国語科の目標は次のとおりである。

国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力を伸ばし心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

従前の目標と比較すると、「理解」と「表現」の順序が入れ替わり、表現力の育成を重視する姿勢がうかがえる。また、新しく「伝え合う力を高める」が加わり、言語による相互伝達や相互理解の能力を高めることが求められている。「伝え合う力」とは、互いの立場や考えを尊重しながら言語を通して適切に表現したり理解したりする力のことであり、急速に変化していくこれからの社会の中で、異なる考えや立場にある人々の間で理解し合い伝え合うことができるよう、是非とも身に付けさせなければならない力である。

また、平成 10 年 7 月に示された教育課程審議会の答申では、自ら学び自ら考えるなど、生徒の「生きる力」を育成するという改訂の趣旨を踏まえ、おおむね次の点が改善の基本方針として示されている。

・言語の教育としての立場を一層重視する。
・互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力を育成することに重点を置く。
・自分の考えをもち論理的に意見を述べる能力、目的や場面などに応じて適切に表現する能力、目的に応じて的確に読み取る能力や読書に親しむ態度を育てることを重視する。
・領域構成を「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」及び言語事項の３領域１事項とする。
・指導の充実を図る観点から、言語活動例を示す。
・各領域の指導時間数の目安を示す。

つまり、国語科の学習指導は、言葉による表現や理解の基本的な能力を身に付けさせ、その上に立って言葉で伝え合う力を高めること、そして、自ら学び、自ら調べ、考え、話し合い、問題を解決していく能力を育てていくことを目指しているのである。

2　国語科における改善の内容

Q　高等学校国語科における改善の要点は何か。

今回の改訂で重要なのは、ややもすれば知識中心・教師主導型の指導に偏りがちであった高等学校国語科の授業から、生徒が主体的に言語活動を行い言語能力を伸ばす学習を展開する授業へと指導を改善するところにある。

そこで、科目構成として、適切に表現する能力、伝え合う力を高めるために国語表現に関する２つの科目を設け、「国語表現Ⅰ」は選択必履修科目とした。

また、実践的な指導の充実を図ることを目的

に、各科目ごとに具体的な言語活動例が示された。内容を大別すると次のような言語活動である。

- 課題に応じて必要な情報を収集し、その成果を基に報告や発表などを行う言語活動
- 文章の理解を深め考えを広めるために、関連ある文章を読んだり読み比べる言語活動
- 題材を選んで考えをまとめ、発表、討論したり意見を書いたりする言語活動
- 文章を読んで感じたことや考えたことを文章にまとめたり話し合ったりする言語活動
- 相手や目的に応じて話をしたり文章を書いたりする言語活動
- 表現上の特色や効果について考えたり話し合ったりする言語活動
- 古文や漢文の調子などを味わいながら音読、朗読、暗唱する言語活動

言語活動例には、情報の読みとりや文章の読み比べなど、問題解決学習に役立つような生徒の主体的な読みの学習が示されている。この内容を踏まえると、国語科においては、表現能力の育成を重視するとともに、読むことの指導内容の改善を図ることが重要視されなければならない。

つまり、書き手の立場に立って的確に読み取る能力を養い、その確かな読みの力を基盤として、読み取った内容について自分の考えをもち、話し合ったり意見を書いたりする言語活動学習の指導が期待されているのである。

3　授業改善の方向

> Q　高等学校国語科における授業改善の方向はどのようなものか。

国語科における改善の内容を踏まえ、次の3点に留意して授業改善を図る必要がある。

(1) 生徒の主体的な言語活動が行われる授業を展開する。

生徒が課題意識をもって「話す・聞く」、「書く」、「読む」活動を行うことで、生徒一人一人の言語能力が高まる授業を展開する。

そのためには、教師が解説して進める授業やいわゆる一問一答式の発問による授業展開など、生徒の主体的な言語活動が行われない授業になっていないか、日々の授業を再点検する必要がある。また、「読むこと」の学習指導においては、本文の内容理解を中心とするいわゆる内容中心主義になりがちなので、その授業でどのような言語能力を身に付けさせるのかを明確にした授業計画を立てなければならない。

(2) 言語の教育という観点から指導目標及び学習目標を設定する。

授業の中で生徒は「話す・聞く」、「書く」、「読む」活動をそれぞれ行っているが、国語科の授業では、言語の教育という観点でそれらの活動をとらえ、それぞれの領域の言語能力を伸長させることを目標とした意図的・計画的な指導を行わなければならない。

そのためには、1つの単元で指導の対象とする言語能力は原則的に1つに絞り指導目標を設定することが必要である。その上で、教師は、指導目標に照らして、その授業で生徒に身に付けさせる言語能力を明確にして授業に臨むことが重要である。

また、教師は、生徒が学習目標を確認し自分の言語能力について具体的な課題をもって学習できるように授業を展開させる必要がある。

(3) 評価規準、評価方法、評価場面を明確に設定する。

目標に照らして、学習者の実現状況を適切に評価し、指導に生かしていくための評価活動を充実させる。

また、教師による評価とは別に、学習活動と

して生徒に自己評価や相互評価をさせることで、課題意識をもって主体的に学習に取り組ませる態度を養うことができる。

> Q　学習指導等の改善・充実のための課題にはどのようなことがあるか。

平成 17 年度高等学校教育課程実施状況調査の結果を踏まえ、次の３点に留意して学習指導等の改善・充実を図る必要がある。

(1) 基礎的・基本的な知識・技能を確実に身に付けさせる指導の充実

生徒の多くは国語の大切さを認識しているが、一方、国語の授業に対する興味がもてず、関心が低い生徒も少なくない。その要因としては、基礎的・基本的な知識・技能の定着が十分ではないことが考えられる。そこで、基礎的・基本的な知識・技能を確実に身に付けさせるための指導を工夫し、理解や表現の能力を定着させるとともに、それを活用して、自ら進んで理解し、考え、表現したり、課題を探求したりする態度や能力を育成する指導を一層充実する必要がある。

(2) 評価しながら読む力や論理的に考える力、表現する力を育成する指導の充実

複雑化する社会の中では、文章や話の内容や思考の確かさを評価したり、自分の知識や経験と関連付けて自分の考えを論理的にまとめたりする力を身に付けることがますます大切になってくる。そこで、評価しながら読む力を身に付けるために、「何が書いてあるのか」という読みにとどまらず、「なぜこのように書いているのか」、「この書き方は適切か」などということについて考えたり、まとめたりする指導を重視する。また、自分の考えを自由に述べるだけではなく、自分の意見を筋道立てて述べる力を身に付けるために、文章や話の構成や組立てに目を向けさせる、自分で考えたことを根拠に明確にして述べさせるなど、論理的に考え、表現する指導を一層充実する必要がある。

(3) 古典に親しむ態度を育成する指導の充実

今回の調査では、前回(平成 14 年度)と比較して、古典に関する問題の正答率が低下した。古典を味わうためには、古典を理解するための基礎的・基本的な知識・技能を身に付けていなければならないが、従来その指導を重視しすぎるあまり、多くの古典嫌いを生んできたことも否めない。そこで、古典の原文のみを取り上げるのではなく教材等にも工夫を凝らしたり、古典の授業のみならずあらゆる機会をとらえて、古典と現代の言葉との関連を意識させたり、作品を通じて日本文化の価値を理解させたりすることで、古典に親しむ態度を育成する指導を一層充実する必要がある。

4　指導と評価について

> Q　適切な評価はどのような手順で行えばよいか。

(1) 教科・科目の目標と観点別評価の設定

各学校において、自校の学力の実態を把握し、学習指導要領に示された教科・科目の目標及び内容と、各学校で設定されている教育目標を踏まえて目標を設定する。

そして、その目標の実現状況を評価するために目標に準拠した評価を行う。目標は多面的な側面をもち、どの側面からとらえるかによって評価は異なったものになるので、評価の観点を明確にして具体的な評価活動に入る必要がある。国語科の評価の観点は、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の３領域の能力と「関心・意欲・態度」、「知識・理解」の５

つの観点で構成する

<評価の観点と趣旨>

観点	趣　　旨
関心意欲態度	国語や言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図り、進んで表現したり理解したりするとともに、伝え合おうとする。
話す聞く能力	自分の考えをまとめたり深めたりして、目的や場面に応じ、筋道を立てて話したり的確に聞き取ったりする。
書く能力	自分の考えをまとめたり深めたりして、相手や目的に応じ、筋道を立てて適切に文章に書く。
読む能力	自分の考えを深めたり発展させたりしながら、目的に応じて様々な文章を的確に読み取ったり読書に親しんだりする。
知識理解	表現と理解に役立てるための音声、文法、表記、語句、語彙、漢字等を理解し、知識を身に付ける。

(2) 指導と評価の年間計画の作成

・1つの単元で指導の対象とする領域は1領域に絞り、1年間を見通して単元構成に沿った指導領域の効果的な配分を行う。

・「国語総合」は、「話すこと・聞くこと」と「書くこと」の配当時間数の目安が示され、「話すこと・聞くこと」を主とする指導には15単位時間程度、「書くこと」を主とする指導には30単位時間程度を配当するものとしているので、それに基づいて計画を作成することにも留意しなければならない。

(3) 単元における目標と評価規準の設定

・各単元においては、1単元1領域の指導を基本とする。他の領域とも関連させた学習を展開することは大切であるが、指導の対象とする領域は1つに絞る。

・教科・科目の目標を踏まえて、単元の目標を設定する。単元の目標は、「指導の対象とする領域の力」と「関心・意欲・態度」と「知識・理解」の3観点について設定する。

・目標に即して、その実現状況を客観的に判断するための拠り所として評価規準を設定する。評価規準が示す学習状況は、目標に照らして「おおむね満足できると判断される」状況であり、具体的な生徒の姿として設定することが肝要である。

(4) 各時間の指導と評価

・各時間における評価は、生徒一人一人について、評価規準に基づいて行う。評価規準が示す状況を実現していれば「おおむね満足できると判断される」状況（B）であり、実現していなければ、「努力を要すると判断される」状況（C）であると評価する。

・さらに、「おおむね満足できると判断される」状況（B）について、質的な高まりや深まりをもっていると判断されるとき、「十分満足できると判断される」状況（A）という評価になる。

・今回の教育課程改訂の方針である「基礎・基本の確実な定着を図る」ことを踏まえると、評価は、行ったらそれで終わりというものであってはならない。特に「努力を要すると判断される」状況（C）と評価した生徒に対する手だてが具体的に講じられなければならない。そのためには、「努力を要すると判断される」具体的な状況を予め想定し、授業の中で適切な助言が行えるよう準備しておく必要がある。

・各時間における評価は、学習目標に照らして、3つの観点（「指導の対象とする1つの領域の力」と「関心・意欲・態度」と「知識・理解」）のうち対象となる観点から行う。

・各時間の学習指導を行うときには、目標の実現状況を効果的に評価するための評価方法を検討し、各時間の学習指導の中で効果的に評価できる場面を具体的に設定しておかなければならない。

・観点別に実施した評価は、単元ごとに総括し

ておくことが望ましい。

Q　指導と評価の一体化とはどのような考え方か。

「指導と評価の一体化」について、平成 12 年 12 月に示された教育課程審議会答申には

指導と評価とは別物ではなく、評価の結果によって後の指導を改善し、さらに新しい指導の成果を再度評価するという、指導に生かす評価を充実させることが重要である。

と述べられている。これは、目標に準拠した評価により基礎・基本の確実な定着を意図した指導においては、重要な点である。

生徒を数量的に評価したり相対的に評価するのとは違い、生徒一人一人に基礎・基本を確実に身に付けさせることができたかどうかを見とどけることが大切であり、評価により基礎・基本の定着度を測り、その結果に応じて授業の中で指導内容や方法を変更し、生徒一人一人に対して指導・助言を行ったり、次時以降の学習指導の在り方を検討することが求められるのである。

〈単元ごとの指導と評価の計画例　古典〉

1　科目名　国語総合　（古典分野）
2　単元名　随筆『徒然草　名を聞くより』　（全２時間）
3　単元の概要

生徒の実態	授業者の指導によりノートをとったり、指定した単語について辞書を引いたりといった、古典を読解する導入段階を一通り済ませた１年生を対象とする。３年間にわたり古典を通じて豊かな言語体験をさせることを目標として授業を進めていくための、基本となる姿勢作りを目的としている。
単元の目標	ア　筆者の感覚を表現に即して読み味わい、内容を発展させることで自分の考えを深めようとする。（関心・意欲・態度） イ　随筆全体の展開と構成を的確にとらえるとともに、登場人物の人物像や筆者の感覚を、表現に即して読み解く。（読む能力）＜国語総合　C 読むことウ＞ ウ　古典の用言の文法に対する理解を深め、語彙を増やす。（知識・理解）

4　単元の評価規準

関心・意欲・態度	読　む　能　力	知　識　・　理　解
①辞書や文法を手がかりに、自分の力で内容を読み解こうとしている。 ②課題を通じて、主体的に読解をしようとしている。	①『徒然草』の筆者の感覚を、表現に即して読み味わっている。 ②『徒然草』の描こうとしたことについて、課題と他の生徒との交流を通じ、自分の考えを深めている。	①文中の語句の意味や用言の活用などの読解に必要な文法事項を理解している。

5　指導と評価の計画

時間	各時間の目標	主な学習活動	各時間の具体的評価規準	評価方法
1	・「名を聞くより」の内容に興味をもつ。 ・兼好法師のものの見方や考え方を理解する手がかりとして、課題を利用して自分のものの見方や考え方を整理する。 ・交流を通じて、理解のための幅を広げる。	・示された名前から、人物像をイメージし、実際の人物を目にした時とのギャップの有無を自己確認する。 ・地元に関する昔の話を聞き、何がイメージされるかを文章に書く。 ・自分の経験した不思議な感覚を想起する。 ・以上の内容について、４～５人のグループを組み、交流する。本文にはどんなことが書いてありそうかを話し合う。	ア「名を聞くより」の内容について関心をもち、積極的な態度で課題に取り組んでいる。【関②】 イ友人の書いたものを読むことにより、イメージの幅を広げている。【読②】	・観察（課題への参加の様子）（ア） ・観察（交流の様子） ・点検（プリントの記述）（イ）

2	・「名を聞くより」を訳すために必要な言語事項を確認する。 ・各自で本文の内容を理解する。 ・自分と兼好法師の、ものの見方や考え方を比較し、本文の内容を理解するとともに、古典を学ぶ意義を実感する。	・「名を聞くより」を起立して個々に音読する。 ・教師の指定した単語を、古語辞典で各自調べ、適切な意味をノートに記す。 ・これまでのノートから、この本文で使用している単語や言い回しなどを確認する。 ・各自で単語の意味とノートの内容を使い、全文を現代語訳する。 ・指定された箇所の訳を発表する。最終的に妥当な訳をノートに完成する。 ・訳し終わって、自分の予想と比べ、内容にどのような印象をもったか、最後に感想を書いてノートを提出する。	ア辞書やノートを利用して、必要な言語事項を理解している。【知①】 イ言語事項を利用して、自分の力で現代語訳している。【関①】【読①】 ウ古典に書かれた感覚と自分の感覚を比較し、内容に対して実感のこもった感想をもっている【読②】	・観察（机間指導） ・点検（ノートの記述）（ア） ・観察（机間指導、発表）（イ） ・点検（ノートの記述）（ウ）

6　学習指導案

本時の位置	1時間目（全2時間）
本時の学習目標	ア　「名を聞くより」に描かれた状況を本文の読解をする前に体験し、『徒然草』への興味をもち読解への意欲を高める。（関心・意欲・態度） イ　本文に描かれた兼好法師の感覚を理解する手がかりとして、本文の読解に先んじて「名を聞くより」に描かれた状況についての自分の感覚を整理する。（読む能力）

	学習内容	学習活動	指導上の留意点及び評価
導入 5分	□本時の学習活動と目標の確認	①本時の学習活動は、本文に描かれた兼好法師の感覚が自分の感覚と一致するかどうかを確認して内容理解を深めるために、「名を聞くより」の内容を、実際に読む前に体験、予想することを確認する。	・目標と活動は板書して示す。この後、机間指導の際に、活動が十分にできない生徒に対して、活動内容を助言するための手がかりとする。
展開 40分	□名前だけを聞いて、その人物をイメージする。〔課題①〕 □昔話を聞いて、イメージしたことを書き留める。〔課題②〕 □経験した不思議な感覚を想起し文章にする。〔課題③〕 □グループ交流	②黒板に生徒の知らない芸能人の名前を１つ書く。生徒はその名前からイメージされる「顔・体型」「性格」をワークシートに書き込む。できれば顔を描く。 ③全員が書き終わった時点で、名前で示した芸能人の写真を掲示する。実際に見た感じと、名前から受けたイメージとを比較して、どの程度ずれがあったか、なかったかを、ワークシートに記入する。 ④２人程度が③を発表する。 ⑤授業者による、地元に関する思い出話を聞く。（例　瑞浪駅周辺で小学校時代に経験したこと） ⑥聞きながら頭に浮かんだことを、ワークシートに書き込む。 ⑦これまで経験した、不思議な感覚や体験を思いつくだけワークシートに書き出す。（例として「金縛り」などを提示する） ⑧６～７人のグループになって、プリントに書いた内容を、順番に読み上げていく。 ⑨一番皆が共感できる内容のものを１つ選ぶ。時間があれば、「名を聞くより」にどんなことが書いてありそうかを話し合う。	・別紙のワークシートを配布した後、具体的に３つの課題を実施することを確認する。 ・黒板にプリントの内容を書いておく。 **目標イに対する評価規準と評価方法** 〔規準〕書くべき内容を的確に理解して、自分の感じ方を分かりやすく記している。特に細かく記述できているものや、独自な内容のものがあれば、「十分満足できる状況」Ａとする。〔方法〕点検（ワークシートの記述） 〔状況Ｃへの手だて〕 ・課題①は、書きやすい項目から書いてもよいことを助言する。 ・記述できない生徒には、「何が頭に浮かんだ？」と聞いて話をさせてみる。 ※プリントを交換して読むのではなく、必ず本人が読んで伝えるように指示する。 **目標アに対する評価規準と評価方法** 〔規準〕本文に描かれた状況に関心をもち、自分の考えを積極的に発表し、仲間の発表を聞き、自分の感じ方と比較している。 〔方法〕観察（机間指導） これは読んだ生徒が友人の反応から自分の書いたものの普遍性や独自性を実感するためである。
まとめ 5分	□本時の学習のまとめと次時の予告	⑧自分の取り組み方を振り返る。 ⑨次時は自分の感じ方と照らし合わせながら「名を聞くより」を現代語訳し、内容読解をすることを確認する。	・教師の方から、全体的な取り組みが意欲的であったかどうかの評価をし、特に面白かったものなど、次回まで覚えておきたい内容を整理する。 ・次時の現代語訳を楽しみに待てるような締めくくりをする。